



理学部同窓会だより



発行：2013年12月1日
発行者：学習院大学
理学部同窓会

理学部同窓会だより発行によせて

理学部同窓会会長 久邇朝宏



会長 久邇朝宏

理学部の第一期生が誕生したのは昭和二八年です。その後同窓会が活動し始め、同窓会誌の第一号は昭和三八年に発行されました。それ以降、ご寄付いただいた方へのお礼として差し上げる形で、ほぼ5年に一度発行を続け、直近では平成二十一年に第一〇号を発行しました。今年に入って第十一号の準備に入りましたが、多額の資金が必要で寄付では賄いきれない、五年毎では発信情報が遅過ぎ、また伝達範囲が限られる、その割に労力が多大、などから、今回の「想」方式に到達いたしました。今後半年毎の桜友会報に同梱して、同窓会の活動や理学部の情報などを報告してまいります。担当委員一同張りきっておりますので、どうぞよろし

くお願いします。

セピア色に染まった五〇年前の同窓会誌第一号を開きますと、当時の近藤正夫物理学科主任の「嫁と実家」が目を引きまします。『いくつになっても、秦野へ行くのはうれしいよ』で始まる文章。これはお亡くなりになる直前のお母様の言葉で、秦野はご生家。以下、次のような趣旨で綴られています。

「お嫁さんにとつては、責任のない立場で甘えられる場所はお嫁以外にはない。もし理学部を嫁を送りだす実家に例えれば、末永く隆盛に栄えなければならぬ」

「この「理学部」には「同窓会」も含むと拡大解釈します。お忙しい時代は仕方ないとして、ある程度のお歳になった時に、『そうだ、同窓会があるじゃないか!』と気づいていたきたい。それまでこの「想」が身近にあって、お役に立てれば嬉しいと思ひ、心をこめてここに第一号を送り出す次第です。

理学部同窓会だより発行によせて

学習院大学35年

理学部長 持田邦夫



持田理学部長

「万難を排し、帰国せよ」と仰々しい手紙を恩師桜井先生（東北大理）から受け取って、学習院大学理学部に小林貞之介先生の後任として勤務してから、35年になる。

助手としての教育経験がなかった分、全力で学生を指導した。朝遅く登校する学生には、舎宅の我が家で朝食をとらせて、早く実験するように指導した。

実験は3〜4時間が一つのサイクルで、朝1回、昼2回、夜1回、一日4サイクルは行わねばならないとの実験指導に対し、研究室の学生から「先生、ここは国立大学ではなく、学習院大学です」と抗議され、鍵を掛け、実験室に入れなくされたこともあった。また、父母の方からも、「私学なのに何故遅くまでそんなに実験させるのか」と、抗議の電話を多くいただいたが自分を基準に実験・研究指導した。着任当初、学生の就職には大

変苦勞した。当時は大変な就職難であった。また、研究室には実績もなかった。しかし、学生の希望は非常に高かった。学習院大学や私の大学のネットワークをフルに利用して、就職活動を行った。学習院大学の先輩、小野田さん、星野さん、浅野さんなどに感謝しきれない程大変お世話になった。事務の貝沼さんに背中を押され、経済学部の方に先生から島根県知事になられた恒松氏にも電話をし、学生の就職をお願いしたりした。

休みを利用して多くの卒業生が研究室を訪問し、現況を楽しそうに報告してくれる。名刺を見ると、部長の肩書が付き始めた。理学部の就職説明会に多くの研究室の卒業生が協力してくれるようになった。

大川先生から、「持田さん、学習院大学理学部は、私学の中で大学の先生になつてゐる割合が一番多く、このことを大切にしてください」と言われたことがずつと胸に残る、博士課程を終えた7名の学生が大学に残り、うち4名が研究室を持つほどになった。後5年、すっかり学生を指導していこうと思う。

村松研究室では、様々な微量元素や同位体の分析法の開発およびその環境・地球化学分野への応用に関する研究を行っています。特に、「ヨウ素」に魅せられてきました。房総半島の地下から高濃度のヨウ素を含んだ塩水が産出し、そこから世界の約3割のヨウ素が生産されています。また、世界の約5割はチリのアタカマ砂漠に産するチリ硝石から採掘されております。さらに、メタンハイドレートが存在する海底堆積物中にも高濃度のヨウ素が含まれています。なぜ、これらの地域にヨウ素が多いのかを解明するため、現地調査に加え、半減期1600万年のヨウ素129という放射性同位体や微量元素を分析しています。



村松教授 (昭47化)

研究室便り
村松研究室

原発事故後は、福島県からアトバイザーの要請を受け、「放射能から人と環境を守る」研究プロジェクトを立ち上げました。放射性ヨウ素やセシウムの環境中での分布、農耕地や森林での移行の解明を、研究室の学生とともに進めています。村松康行

特集

南1号館の思い出

浅野三千秋(昭29化)

【その一】理学部化学班

昭和22年、私が中等科3年の時から「理学部化学班」に入れて頂きました。部室(研究室)は最初、西日の強い216号室で、本来は動物飼育室故、入部した時は鉛張りの魚の飼育槽が積み上げてあり、一部を棚や机代わりに使いました。一年後、小使室だった104号室に移り西日の難からは逃れましたが何も無い部屋で設営に苦労しました。しかし、ガス、水道、電気が自由に使えた点、助かった記憶があります。その頃の研究内容は、「学習院理学部雑誌」復刊第一号(昭和23年)や「輔仁会雑誌」第170号(昭和23年)第171号(昭和24年)に詳しく載っています。故三浦謹一郎氏に



よる報文や報告に依ると、一次化学反応の反応速度測定、グルタミン酸ナトリウムの合成、蛋白質の検出反応、光電管による

溶液濃度測定法、クロロフィルの化学、等多くのテーマを熟し、木村健二郎先生を始めとした著名な先生方の講演も聞き、文化祭では公開実験を初等科や105号教室で行った記憶があります。104号室は昭和27年に向山光昭先生の研究室に決まり、化学班は高等科の建物に移転しました。

【その二】105号階段教室

化学班前の105号室はガスの熱で換気するドラフト付きの化学の授業中心の階段教室でした。それ故、一番後ろは天井に手が届く高さで色々と落書きしましたが、その中で一人の友人の渾名が「火星人」だったので、当時有名だったSF小説「火星兵団(?)」の火星人の絵を描いた処、どういう理由だかそれだけは消されずに残り、有機実験室、更に、昭和27年小林研究室になった後も残って居ました。蛇足ですが、この小説の中でロボットの形をした火星人が橋の下を通る時、上から縄を垂らして吊り上げる場面の舞台が「千歳橋」でした。105号室は私が小林研究室の学生、大学院生から助手を退職する迄の巣とな

り、小林先生を囲んでのストーブル談義に花を咲かせ、理学部以外の学生や中等科の生徒迄が遊びに来た思い出の部屋です。

【その三】工作工場

私が理学部に居た時の工作工場では、伊庭さん・濱野さん・根岸さんに散々厄介をおかけしました。未だ戦後の復興混乱期で研究室の備品等も自作せねばならず、それが企業に入った後も大変役に立ちました。それは別に、当時の理学部名物のソフトボールでは飽き足らず、工場の周囲にゴルフコースを作り父の遺品のクラブを持ち込んで楽しみ、遂には工場の屋根越えのコースを作ったのは良いが、手を狂わせてガラスを割り主任の伊庭さんによく叱られたものでした。叱られ役は専ら濱野さんでそれをカバーする為に、あちこちに在った(?)板ガラスを探して来てはストックして置いたものでした。



ドラフトチャンバー

理学部同窓会の現状

理学部同窓会は本年で五七歳になりました。会員は約七千四百名です。活動の主要範囲は、

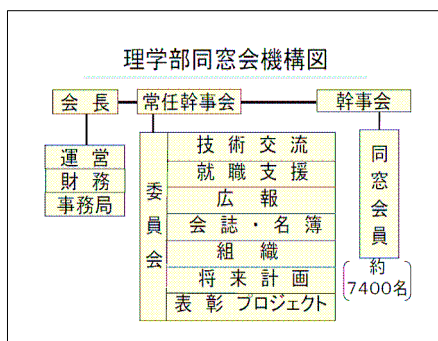
- 一、会員に対するサービス
- 二、準会員に対するサービス
- 三、理学部・桜友会への協力
- ・情報発信/親睦など
- ・就職支援/表彰など
- ・各種行事に参加/交流

組織には9つの委員会と事務局があり、運営の中心は常任幹事会です。三二名の常任幹事が事務局や複数の委員会などに重複所属し、活動しています。常任幹事名などは今号の桜友会報の理学部の頁をご覧ください。

以下会員向け委員会のご紹介。
【技術交流委】 理学部の先生と卒業生の講演会を運営します。
【就職支援委】 大勢の卒業生の協力を得て、学生の就職活動を支援・指導します。理学部の就職率の高さに貢献しています。

【広報委】ホームページや桜友会報の記事を作成します。
 【会誌・名簿委】この「想」を企画制作します。

【表彰プロジェクト】頑張った学生を卒業式で表彰します。皆さま、理学部同窓会の総会や技術交流会などの行事に、どうぞ積極的にご参加ください。お待ちいたしております。(会長 久邇朝宏)



編集後記

題字の「想」は編集委員の一人鈴木晴郎さん(昭45化)の筆によるものです。「インテリアアートのイメージで「想」を表現してみました。想像、想起、追想、着想、理想、随想、感想、発想、空想などの熟語に使われていますが、いろいろな心模様を皆さんに描いて頂ければ幸いです」(鈴木談)

手作りで行き届かない点が多々ありますが、年二回理学部卒業生の皆様に理学部と理学部同窓会の状況をお知らせして行きたいと思っております。